

家族アセスメントツール Family System Test (FAST) について

中 見 仁 美

1 家族アセスメントとは

臨床現場で家族への治療的アプローチを実施するためには、家族についての情報収集が不可欠である(馬場、1990)。しかし、その情報収集には非常に多くの時間や労力が費やされる。そこで短時間でまとまった情報を得られる家族アセスメントが有用となる。家族アセスメントにはさまざまな方法があり、観察法(自然観察法、実験観察法)、描画法(合同家族描画法、家族診断画法)、質問紙法(親子関係診断テスト、FACESⅢなど)に加え、シンボル配置技法 *Figure placement technique* (家族関係単純図式投影法、家族イメージ法、*Doll Location Test*, *Family Map* など)に分類されている(築地、2005)。このうちシンボル配置技法はさまざまな場面を設定し、その場面の設定に沿って対象者が人形をボード上に配置し、個人が認知している家族構造を評価する方法である(Ghering & Marti, 1993)。このシンボル配置技法の利点は家族内の二者関係、三者関係、家族全体を同時に評価できることである(Feldman, Wentzel, & Gehring, 1989)。

シンボル配置技法の1つにGehring(1993)が開発したFamily System Test (FAST)があり、現在日本以外にもフランス、イタリア、ドイツ、中国などでも翻訳され、広く使用されている。FASTは実施時にマス目の入ったチェスのようなボード上に男性、女性を示す2種類の木製の人形、木製の3種類の高さ(1.5 cm、3.0 cm、4.5 cm)のブロックを対象者に配置させる。これによって、家族構造において鍵となる概念である「親密さ(cohesion)」と「力関係(hierarchy)」を表現することになる(Fig. 1参照)。

「親密さ」は「家族メンバー間の情緒的な結びつきあるいは愛情」と定義され、「力関係」は明確な一つの定義はないが、「権威」、「決定力」、「他の家族メンバーへの影響力」と関係しているとされている(Gehring, 1993)。「親密さ」はボード上の人形間の距離で、「力関係」は人形の下に積まれたブロックの高さによって測定される。その後、「親密さ」と「力関係」の両方を考慮し、家族関係の構造タイプ(「調和型」*balanced*、「中間型」*labile-balanced*、「非調和型」*unbalanced*)を決定するテストである(Fig. 2参照)。

FASTは評価の基準が確立されており、明確な評価基準のない他のシンボル配置技法よりも評定しやすい。さらに人形配置後に半構造化面接を行い、家族についてより詳細に尋ねることになっている。

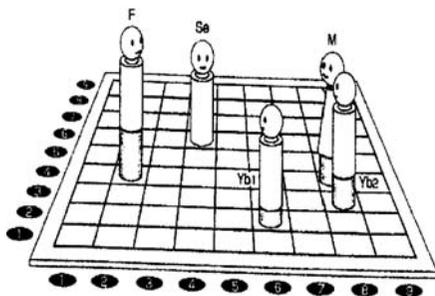


Fig. 1 FAST 人形配置の図 (築地、2001、p.137より引用)

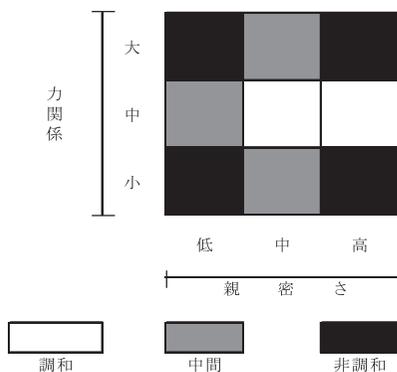


Fig. 2 家族の親密さと力関係による家族関係構造の分類 (Gehring, 1993/1997、p.34より引用)

2 FAST の実用に向けて

Gehring & Wyler (1986) はまず、家族療法の治療効果を測定するアセスメントが必要とし、FAST が有用であるかどうかを検討している。この研究では、家族療法を行っていた 6 家族の父親、母親、6 家族を治療したセラピスト 1 名を対象に FAST を実施し、治療前、治療終了後 (現在)、現在の理想、現在の葛藤の計 4 場面の家族を表現させている。その結果、親密さは現在の葛藤と治療前、治療終了後 (現在)、現在の理想の順で高くなっていた。また半構造化面接の回答から、対象者は人形間の距離について、距離が近いと家族に肯定的、距離が遠いと否定的に捉えていた。一方、人形の高さ (ブロックの高さ) について、現在の理想、治療終了後 (現在)、現在の葛藤と治療前の順で高くなっていた。しかし半構造化面接の回答から、対象者は高さの意味を一様 (uniform) には捉えていなかったと報告している。

次に Feldman & Gehring (1988) は、青年期を通して家族関係の認知をみるために 12 歳、15 歳、18 歳 (6 年生、9 年生、12 年生) の子ども 150 名を対象に FAST を行い、それぞれ日常の家族 (以下、日常場面) と理想の家族 (以下、理想場面)、2 者関係 (父母間、父子間、母子間) を調査している。その結果、子どもが発達するにしたがって、日常場面で全体に親子間の親密さが減少し、親子の力関係 (power) の差が少なくなるが、親密さと力関係の変化はそれぞれ年齢によって異なっていた。父子間、母子間に注目すると、親密さにおいて 12 歳では父親よりも母親を身近に感じているが、15 歳、18 歳では両親を同程度身近に感じ、母親との親密さの減少が目立った。力関係は母子間の力の差は変わらないが、父子間の力の差が加齢ともに減少していた。つまり親子間の発達の変化は、母子間の親密さの減少、父子間の力関係の差の減少で生じることが示唆された。しかし、子どもがどの年齢においても、父母間が家族内でもっとも親密で、両者の力の差が小さく、親子間の世代間境界は明確であった。一方、理想場面では親子間の親密さが高く、力関係はほどよい差があり、両親間の力関係はほぼ平等に近く、両親は子どもよりも

力が大きかったとされている。日常場面は年齢によって変化するが、理想場面は年齢による変化がないとされている。これらのことから、発達的变化は日常場面の方がより顕著に見られることが明示された。

理想場面を検討した後、Gehring, Wentzel, Feldman & Monson (1990) は青年期の子どもをもつ親 (134 名)、青年前期 (小学 6 年生、平均年齢 11.5 歳・170 名)、青年中期 (中高校生、15~18 歳、平均年齢 16.3 歳・109 名)、青年後期 (大学 1 年生、平均年齢 18.7 歳・47 名) を対象に FAST の葛藤中の家族 (以下、葛藤場面) を配置させ、検討している。その結果、Gehring et al. (1990) は青年期の課題である親からの自立をめぐる、親子間の葛藤が増加することを示唆している。親子間葛藤は青年期前期、中期 (12~18 歳) に増加し、高校生の終わり頃にピークを迎える。その後、青年期後期 (19 歳以降) に親子間の葛藤が減少するとしている (Gehring et al., 1990)。

FAST の信頼性・妥当性についても検討されている。信頼性は 1 週間後の再検査で、青年前期で親密さが $r = .63$ 、力関係が $r = .63$ 、青年中期で親密さが $r = .87$ 、力関係が $r = .83$ と安定しており、さらに青年期中期 20 名の 4 ヶ月後の再検査では親密さが $r = .59$ 、力関係が $r = .42$ と比較的安定していた (Gehring & Feldman, 1988)。妥当性は FACES III¹⁾ との関連をみることによって行われている。その結果、FAST の親密さと FACES III の「凝集性」において $r = .47$ と比較的高い相関が見られたが、FAST の力関係と FACES III の「適応性」において $r = .21$ と低い相関にとどまっている (Gehring, 1993)。

次に Gehring は新たな評価方法を見出している。それは親密さと力関係をそれぞれ 3 群に分類し、家族関係構造を 3 つの型に当てはめる評価方法である。その評価方法を用いて、Gehring (1993) は FAST による健常児と精神障害児 (行動障害、情緒障害、感情障害などが含まれる) の家族を比較している。その結果、日常場面において健常児は精神障害児よりも家族全体の親密さが高く、力関係も世代間境界が明確であることを見出している。理想場面において、健常児群の方が親密であるが、力関係に両群の相異は顕著ではなかった。そのため、理想場面について親密さのみに臨床的な弁別妥当性があると示唆している。葛藤場面について両群に差はみられなかった。このことから、FAST の配置には親密さのみ日常場面と理想場面には臨床的な弁別妥当性が認められている。しかし、力関係には Gehring 自身もあまり妥当性を見出せないでいる。

Gehring は最終的に家族関係構造 (「調和型」・「中間型」・「非調和型」) の 3 つのタイプに分ける評価基準を設け、日常場面において健常群では「調和型」が多く、臨床群では「非調和型」が多いことを報告し、欧米において FAST を標準化している。しかし、最終的に力関係の定義が一様でなく、妥当性に欠けているという問題は残されたままであった。

3 FAST を用いた日本でのこれまでの研究

日本においても FAST の有用性が考えられ、盛んに研究されつつある。池田（1996）は日本の大学生に FAST を実施し、大学生による家族構造の特徴を示している。池田によると日本の大学生のいる家族では、父子間の心的距離が母子間の心的距離より大きく、親世代と子世代の力関係の差が欧米に比べて小さい。

また、池田（2001）は健全な青年を対象にしている Gehring の研究データと自らの研究データを比較し、理想場面と葛藤場面で池田のデータと Gehring のデータに有意な差は認められなかったが、日常場面には有意差が認められたと報告している。日常場面で Gehring のデータでは大多数が家族関係構造で「調和型」（62%）に分類され、「非調和型」（10%）はほとんどみられない。一方、日本のデータでは「調和型」が42%と半数以下となり、「非調和型」が27%と多い。池田はこの相異について、父親が母子よりも離れて配置されることを挙げている。力関係では両親間に差があり、その7割以上が母親よりも父親が強いこと、母子間の力関係の差がないか逆転していることを挙げている。つまり、Gehring と自らの研究データの相異は、母子間の曖昧な世代間境界と父親不在という日本の家族特徴のためと結論付けている。

河野（2005）は日本における FAST の発達の变化を検討するため、小学生、中学生、大学生のそれぞれ40名ずつ計120名に FAST を実施している。その結果から、河野は日常場面について、Feldman & Gehring（1988）の研究結果と比較し、3つの相違点を指摘している。1つ目は、Feldman & Gehring では加齢にともない、親子間の親密さが低くなるが、日本では年齢による親密さの差がないこと、2つ目は、Gehring らの先行研究では父母間がもっとも親密で、力関係に明確な世代間境界がある家族が多いが、日本では父母間の親密さは母子間よりも低く、力関係に明確な世代間境界がみられない家族が多いこと、3つ目は Gehring らの先行研究では親密さにも力関係にも性差がみられないが、日本では親密さに性差がみられることである。理想場面については、親密さで年齢による差が認められ、大学生が小・中学生よりも父母間が親密であることを理想とし、力関係では年齢・性別に関係なく、日常場面と同様に父子間の力関係の差が父母間、母子間よりも大きかったとしている。

このように池田（2001）と河野（2005）の日本における FAST の研究から、欧米と比べて日本の世代間境界が曖昧であるために、Gehring が考案した FAST の評価基準が日本の家族には合致していないことが明らかになっている。

築地（2001）は日本での FAST の妥当性を検討するため、女子大学生50名に FAST（日常場面のみ）と日本語版 FACESⅢを実施し、その相関をみている。ここで使用した FACESⅢとは、日本語版 FACESⅢ（草田、1995）である。FAST と日本語版 FACESⅢの相関をみた結果、FAST の親密さと日本語版 FACESⅢの「凝集性」（ $r=.51$ ）、「適応性」（ $r=.36$ ）と相関がみられたと報告している。さらに親密さを示す FAST の2者間の距離（父母間、父子間、母子間）と

日本語版 FACESⅢの「凝集性」との間にも相関がみられ、日本においても FAST の人形間の距離は、家族メンバーがお互いに持つ情緒的なつながりと関連があり、FAST の親密さの妥当性が立証されている（父母間； $r=-.36$ 、父子間； $r=-.59$ 、母子間； $r=-.35$ ）^{2,3)}。しかし、あまり高い相関があるとは言えない。力関係は日本語版 FACESⅢとまったく相関が見られず、妥当性は立証されていない。築地は疎外感を感じている程度によって、女子大学生が FAST で表現する現在、過去の家族が異なるのではないかと考え、妥当性が高かった親密さ（現在の家族と過去（5 歳時）の家族）と疎外感の関連について調査し、FAST と日本語版 FACESⅢ以外の尺度、疎外感尺度による FAST の妥当性を検討している。その結果、強い疎外感を持っている女子大学生は FAST で過去や現在の家族の親密さを低く表現していたとしている。このように築地（2001）の FAST の妥当性研究においても、親密さは妥当性が立証されているが、力関係についてはほとんど立証されていない。

中見・桂田（2007）は、大学生を対象に、FAST の人形配置後に行う半構造化面接の応答と FAST の評価基準との整合性、その整合性と精神的健康度（GHQ）の関連から FAST の日本での妥当性を検証した。その結果、日本の大学生にとって、「親密さ」は意識されやすく顕在的であり、「力関係」は意識されにくく、潜在的であることが明らかにした。

この結果から、力関係を再検討し、日本人が欧米人と比べて、極端であることを好まず、中庸を好むことは質問紙の回答方法などでよく知られている（例えば Hui & Triandis, 1989；Chen, Lee, & Stevenson, 1995）ことを踏まえ、力関係を表現するブロック 1 個の高さを 1.5 cm、3.0 cm、4.5 cm から 0.5 cm、1.0 cm、1.5 cm に小さくするという、独自の変更を行い、FAST を実施した。その結果、Gehring の評価基準を使って分類された家族関係構造の「調和型」が「非調和型」よりも有意に精神的に健康で、家族を肯定的に捉えているという有意差が見られた。さらに面接の応答を家族関係構造ごとにもみると、「調和型」が親密さも力関係も肯定的に述べており、もっともバランスよく家族について語られ、FAST の分類と面接の応答が一致していた。このことからブロック 1 個の高さを小さくしたことで、Gehring の評価基準が日本の家族に適している可能性が出てきた（中見、2010）。

一方で、築地（2015）は力関係の算出方法について新たな提案を行っている。Gehring（1993）のマニュアルでは、親世代（父親・母親）のブロックの高さが低い方と、子ども世代のブロックのもっとも高い者との差を算出することになっている。それに対して、築地（2015）は、親世代の高さの平均と子ども世代の高さの平均の差を算出することを提案している。中見（2010）、築地（2015）のいずれの算出方法においても、今後データを積み重ね、検討する必要がある。

4 その他の FAST の研究

FAST とその他の尺度との関連をみる研究も行われている。築地（1999）は小学校高学年の児童を対象に、学校適応尺度との関連を見ている。学校適応尺度によって、学校適応の高い児童と

低い児童の2群に分け、FASTを用いて、それぞれの児童の家族関係を日常場面、理想場面について調査している。その結果、日常場面で不適応傾向の児童の家族は、適応している児童の家族よりも親密さが低いが、理想場面の親密さに両者の相異は見られていない。力関係は日常場面も理想場面も両者に顕著な違いはなかった(築地、1999)。築地は学校に適応しているか否かの違いが力関係よりも親密さのほうに現れやすいことを示唆している。

池田(2000)は大学生を対象にFASTを実施し、大学生の独立意識尺度(独立性、親への依存性など)との関連を見ている。独立意識尺度によって、独立意識の高群、低群の2群に分類し、2群による親密さの違いをみている。その際にこれまでの個別に人形を配置してもらう面接法ではなく、質問紙型のFASTを実施している。質問紙型のFASTとは、対象者が教示と9×9のマスマスが印刷された用紙に、マスマスに家族メンバーを示す記号を書き込めるようになっている(池田、2000)。この記号間の距離によって親密さを表現する。力関係は記号を円で囲み、円の数が多きほど、その家族メンバーが家族内で力があると表現させる。その結果、親への依存傾向が高いと、父母子の3者間の親密さが非常に高く、親への依存傾向が低いと全体に親密さが低いと報告している。このように、池田は親への依存性をFASTの親密さによって弁別できることを明らかにしている。

このように、日本におけるFASTの研究から、親密さは築地や池田の研究で、他の尺度との関連が見られることが示唆されているが、力関係はほとんど検討されていなかったが、中見・桂田(2009)は、1個のブロックの高さを小さくし、潜在的な力関係を表現しやすくしたFASTを用いて、児童期における父子関係と青年期の家族関係がどのように関係しているのかを検討した。

その結果、児童期の父子関係が現在の家族関係に影響していることが示唆された。児童期に父親の価値観や存在を感じ、父親に子どもである自分の存在を認めてもらい、何かあると助けられると感じていると、現在の家族は「調和型」の家族関係構造であることが示された。親密さは、過去の父親とのかかわり全ての下位尺度と有意な関連が見られた。このことから児童期に父親と十分なかかわりが出来ていたと感じていることが、青年期における家族の親密さの基盤となっていると言える。幼いころの父子関係は親密さ優位であり、高橋(1988)などの先行研究と一致していた。高橋は児童期の父親像を「やさしい」、「陽気な」としている。そのため、幼い頃の家族関係を想起すると親密さのほうに想起しやすいのかもしれない。大野(2001)は、「家族」を情緒な結びつきがあって初めて成立する内発的な関係としている。このことから家族は親密さが顕在的であることが考えられる。

力関係は過去の父親とのかかわりの「保護承認」のみに関連が見られた。児童期に父親が子どもを保護し、頼りになる存在であった場合、青年期において親子の明確な世代間境界を感じると考えられる。青年期の子どもが、父親を家族内で力があると認識することにつながるのは、幼少期に父親と仲の良い関係を築くだけでなく、父親に子どもとして認めてもらい、いつでも力になってもらったと感じることだといえる。この結果は、児童期の父子関係は回想による回答である

ため、実際に父親がどのように子どもに関わっていたかは分からないという限界がある。しかし、子どもの記憶に基づく過去の父子関係が現在の家族関係につながっていることは確かであると言える。力関係の重要性については、小泉・河村（2014）も示唆している。小泉・河村（2014）は、小学3年生から5年生を対象に、FASTと学校生活における意欲、充実感、家族からのソーシャルサポートとの関連を見出している。児童が家族の中で、児童が自身や父親を家族の中で力があると感じていると、学習に意欲的であるとしている。

次に、中見・桂田（2010）は女子大学生を対象にし、母親の就労と性役割意識、家族関係の認知の関連を検討した。その結果、母親の就労による性役割意識の違いは見られなかった。これは、女子大学生の性役割意識には母親の就労形態は直接的には関係ないことを示している。しかし、母親の就労と娘の認知する家族内の力関係に、また、その力関係と性役割意識に弱い関連が見られたことから、母親の就労は娘の性役割意識に間接的に影響していることが考えられる。

母親の就労と家族関係の認知では、力関係のみに違いが見られた。父娘間の力関係において、途中で専業主婦からパートなどキャリアを変更している場合、女子大学生は父親が家族内で力があるとしていた。母親が子育てを終えて働き始めた場合、経済的基盤は父親にあり、母親の就労は副次的であることが多く、そのため娘は父親と母親の力の差を感じるのではないだろうか。

一方、母親がフルタイムで就労を継続していると、途中で就労形態を変化させた場合よりも、子どもである自分と父親の力の差が少なく認知していた。さらに有意差は見られなかったが、父母間で母親が父親よりも力があるとしていた。これは幼い頃から父親と同様に母親が家計を支えているのを目の当たりにしてきているため家庭内で母親に力があると認知し、また、そのような母親をモデルとしているため、子どもである自分と父親の間にもそれほど力の差を感じていないのではないかと考えられる。以上のように、母親の就労によって、子どもである女子大学生の家族内の力関係の認知が異なり、その力関係の認知が性役割意識の差につながってくると考えられる。

これまでの研究（池田、1999、2000；築地、1999、2000；河野、2005、2007；中見・桂田、2007、2009など）では、大学生である子どもがFASTで表現した家族関係と、大学生自身が回答した他の尺度との関連を見てきたが、大学生以外の家族メンバーが回答した尺度と大学生のFASTの関連を見ることがなかった。そこで、中見・桂田（2011）、Nakami & Katsurada（2012）は大学生である子どもがFASTで表現した家族関係と、夫婦間の愛情³⁾との関連を見た。その結果、大学生が両親の方が家族内で力が強く、親子間に世代間境界があり、さらに家族全体が親密で調和のとれた家族関係構造であると認知している、調和がとれてない家族関係構造と認知している大学生よりも、父親が母親に感じる愛情が高かった。家族全体の家族関係構造になると、FASTによる子どもの家族認知は父親の母親に対する愛情に違いが見られたが、母親の父親に対する愛情に違いが見られなかった。

5 FAST の臨床現場での応用

FAST は、さまざまな臨床の現場でも使用されつつある。

①児童虐待

築地（2007）は、児童養護施設において、被虐待児を対象に、セラピー開始時の情報収集、また心理療法の治療効果の測定を目的として FAST を実施している。その結果、セラピー開始時の情報収集において、どの事例でも被虐待児が力関係を細かく表現し、被虐待児にとって力関係が重要であることを示している。心理療法の治療効果については、被虐待児が辛い虐待体験を言語化することが困難な場面で、FAST を介在させることで言語化しやすくなったこと、より治療者と被虐待児の間で具体的なイメージを共有できたこと、被虐待児が FAST で表現した家族を眺め、自身の体験や葛藤を意識化できたこと、それにより自らの辛い体験を再構成できたことが報告された。これらの結果から、築地（2007）は、FAST は心理療法において言語表現を補う道具の1つとして有効であり、家族を表現すること自体に浄化作用があるとしている。

②少年非行

相谷（2001）は、非行により警察に逮捕され、少年鑑別所に身柄を拘束された少年を対象に FAST を実施している。なお、家族の日常場面の代わりに非行時場面、理想場面、葛藤場面を表現させている。その結果、凶悪非行群と薬物非行群に分類し、各群の特徴を見いだしている。相谷（2001）によると、凶悪非行群の非行時場面でも理想場面でも、家族全体がバラバラで、力関係は親と子に差はなく、力関係が存在しない特徴が見られた。薬物非行群の非行時場面、対象である少年だけが家族から離れ孤立し、父親が著しく他の家族よりも力が強く、理想場面では父親が低く、極端な力関係はなくなり、母親を少年が自分の身近に置き、母子の親密さが顕著という特徴が見られた。相谷（2001）は、各群の少年たちには、これらの特徴に配慮した有効な更生を考えられるとしている。

③司法機関

相谷（2003、2010、2015）は、離婚に伴う親権者指定のために FAST を使用した事例を挙げている。事例では離婚後の家族について、夫、妻それぞれに FAST を配置させている。夫の離婚後の家族では、妻が存在せず、夫の実父が家族内で最も力が強いこと、妻の離婚後の家族では、夫の存在が示され、離婚後の家族では妻がもっとも力が強いという特徴が示された（相谷、2015）。この結果から、相谷（2015）は、夫、妻の離婚後の配偶者の取り扱いの違い、離婚後の家族の力関係から、親権者を妻と指定に有効であったことを報告している。相谷（2015）によると、このような FAST の実施は4件とまだ少ないが、親権者を巡る裁判手続きには、今後有用

な手法の1つになるのではないかとしている。

④摂食障害

中見 (2009) は、摂食障害を抱える 14 歳の女性 3 名に実施し、Gehring (1993)、石田 (2006)、中本ら (2006) の摂食障害患者の事例と比較している。その結果、中見の 3 事例では、中本ら (2006) の 3 つの事例と同様に、共通点を見出せなかった。その理由として、同じ摂食障害でも治療開始直後や終了直前など治療中でも幅があるためと考えられる。また、Gehring (1993)、石田 (2006)、中本ら (2006) の事例において、すべての場面で人形が配置されているが、中見の事例では配置されなかった。特に Gehring の事例では、患者がほとんど時間をかけずに配置したという報告と、配置できなかった中見の 2 つの事例とは対照的である。これは、治療経過のどの時期に FAST を実施するかで違いが出てくると考えられる。

6 ま と め

本研究では FAST を含めるシンボル配置技法に触れ、FAST がどのように自由に家族を表現できるかを明らかにした。さらに FAST が欧米で開発され、評価基準が設定された調査研究、日本で FAST を実施した調査研究から、FAST の問題点を明確にした。問題点とは、欧米で標準化された Gehring の評価基準が日本の家族には適さないこと、特に力関係の評価基準は日本の家族に当てはめると、世代間境界が曖昧となること、親密さは他の尺度との関連が見られるが、力関係は見られないことであった。力関係について、日本の家族に適した算出方法が検討されている (中見、2010；築地、2015)。しかし、中見、築地のいずれの算出方法においても、今度のデータを積み重ね、検討する必要がある。また、子ども本人のみではなく、他の家族メンバーの家族認知との関連もあわせて考える必要がある。

さらに、実際の臨床現場での FAST が活用されつつある。しかし、より効果的に活用できるアセスメントツールとなるよう、研究を進めることが必須である。

本論文は 2009 年度に提出した博士論文の一部に、加筆・修正を行ったものである。

注

- 1) FACESⅢとは、自己報告式質問紙法 FACES は世界各国で翻訳、検討が重ねられ、日本においても検討されている (黒川、1990；貞木・樫野・岡田、1992；田村、1994；草田、1995 など)。凝集性は「家族メンバーがお互いに対して持っている情緒的きずな」、適応性は「状況、家族メンバーの発達による変化に応じて、夫婦および家族システムの勢力構造、役割関係、ルールを柔軟に変化させる能力」と定義されている。
- 2) FAST の親密さは距離が短いほど親密である、FACESⅢの「凝集性」は得点が高いほど凝集性が高いことを示す。

- 3) 菅原・詫摩 (1997) が作成した *Marital Love Scale* を使用した。このスケールは 15 項目からなり、夫 (父親) 用と妻 (母親) 用があり、回答は 7 件法で、得点が高くなればなるほど、夫 (妻) に愛情が高いことを示す。

引用文献

- 相谷登 (2001). 第 4 ピークの少年非行－凶悪非行少年と薬物非行少年の家族理解－. 八田武志 (編)、シンボル配置技法の理論と実践 (pp.131-147). ナカニシヤ出版.
- 相谷登 (2003). 親権者の適格性格判断における FAST の活用. 日本家族心理学会第 21 回大会発表論文集、15-16.
- 相谷登・八田武志 (2010). シンボル配置技法－シンボル・イメージを用いた人間関係構造認知に関する研究－. *イメージ心理学研究*、8、69-81.
- 相谷登 (2015). 親権者指定における新たな試み. *人間環境学研究*、13(1)、77-85.
- 馬場禮子 (1990). 第 I 章 家族の心理臨床. 岡堂哲雄・鎌幹八郎・馬場禮子 (編)、臨床心理学大系 第 4 巻 家族と社会 (pp.1-39). 金子書房.
- Chen, C., Lee, S., & Stevenson, H. W. (1995). Response style and cross-cultural comparisons of rating scales among east Asian and north American students. *American psychological Society*, 6(3), 170-175.
- Feldman, S. S., & Gehring, T. M. (1988) Adolescents' perception of family cohesion and power: A methodological study of the Family System Test. *Journal of Adolescent Research*, 3, 33-52.
- Feldman, S. S., Wentzel, K. R., & Gehring, T. M. (1989). A comparison of view authors and reviewers about family cohesion and power. *Journal of Family Therapy*, 3, 64-68.
- Flueuridas, C., Rosenthal, D. M., Leigh, G. K., & Leigh, T. M. (1990). Family goal recording: an adaptation of goal attainment scaling for enhancing family therapy and assessment. *Journal of Marital and Family Therapy*, 16, 389-406.
- Gehring, T. M., Wentzel, K. R., Feldman, S. S., & Monson, J. (1990). Conflict in families of adolescents: The impact on cohesion and power structures. *Journal of Family Psychology*, 4, 290-309.
- Gehring, T. M. (1993). *Familien System Test Manual*. German, : Belts Test Gesellschaft.
- 八田武志 (訳) (1997). FAST (Family System Test) マニュアル. ユニオンプレス.
- Gehring, T. M., Candrian, M., Marti, D., & Real del Sarte, O. (1996). Family System Test (FAST): The relevance of parental family constructs for clinical intervention. *Child Psychiatry and Human Development*, 27, 55-65.
- Gehring, T. M., & Feldman, S. S. (1988). Changing perceptions of Family Cohesion and Power across Adolescence. *Child Development*, 59, 1034-1045.
- Gehring, T. M., & Wyler, I. L. (1986). Family System Test (FAST): A three-dimensional approach to investigate family relationships. *Child psychiatry and Human Development*, 16, 235-248.
- Hui, C. H., & Triandis, H. (1989). effects of culture and response format on extreme response style. *Journal of cross-cultural psychology*, 20(3), 296-309.
- 池田和夫 (1996). 日本人大学生における家族構造認知の特徴－Family System Test による国際比較－. 高知大学人文学部人文学科・人文学研究. 4、11-20.
- 池田和夫 (2000). 日本人大学生の独立意識と親子間の親密さに関する研究. 高知大学学術研究報告・人文学、49、105-113.
- 池田和夫 (2001). FAST による家族構造認知の異文化間比較. 八田武志 (編)、シンボル配置技法の理論と実践 (pp.149-163). ナカニシヤ出版.
- 池田和夫 (2003). 日本人大学生の表現する過去・現在・未来の家族構造. *人間環境学研究* 1(1)、23-30.
- 石田ゆかり (2006). Family System Test (FAST) を活用した家族研究の試み. 日本家族心理学会 (編)、家族心理学年報 24 夫婦・カップル関係－「新しい家族のかたち」を考える－(pp.160-171). 金子書

- 房.
- 河野望 (2005). Family System Test による家族関係の認知に関する発達の研究－小学生・中学生・大学生の比較から－. 人間発達研究所紀要, 17, 34-53.
- 小泉智巳・河村茂雄 (2014). 小学生の家族認知に対する Family System Test を用いた探索的研究－学級生活満足度、学校生活意欲、家族からのソーシャル・サポート、ストレスととの関連－. 学校経営心理学研究, 3, 11-24.
- 黒川潤 (1990). 円環モデルに基づく尺度 (和訳版) の標準化の試み－家族満足度、親－青年期の子どもとのコミュニケーション、FACESⅢについて－. 家族心理学研究, 4(2), 71-82.
- 草田寿子 (1995). 日本版 FACESⅢの信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, 28(2), 154-162.
- 中本順子・平林由香・村手恵子・林吉夫 (2005). FAST (Family System Test) にみられた摂食障害患者 3 例の家族関係の検討－FAST による日本人の家族関係についての予備的研究－. 心身医学, 46(2), 153-159.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2007). 大学生における FAST (Family System Test) の評価基準の検討－面接の応答、精神的健康度との関連から－. 家族心理学研究, 21, 20-30.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2009). 児童期の父親とのかかわりと青年期の家族関係－Family System Test を用いて. 日本心理学会第 73 回大会論文集, 1200.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2010 a). Family System Test (FAST) の新たな試み－力関係を中心に－. 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 208.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2010 b). Family System Test (FAST) における女子大学生の家族関係認知－母親の就労からの検討－. 日本家族心理学会第 27 回大会発表論文集.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2011). Family System Test (FAST) による大学生の家族認知－両親間の愛情との関連について－. 日本心理学会第 75 回大会発表論文集.
- Nakami, H. & Katsurada, E. (2012). University students' perception of parents' relationship using the FAST and their parents' marital relationship". International Society for the Study of Behavioral Development (ISSBD) 2012.
- 大野祥子 (2001). 家族概念の多様性－「家族であること」の条件. 鶴川女子短期大学研究紀要, 23, 51-62.
- 菅原ますみ・詫摩紀子 (1997). 夫婦間の親密性の評価：官記入式夫婦関係尺度について. 精神科診断学, 8, 155-166.
- 高橋宗 (1988). 現代の父親像 (2)：子どもに対する調査データを手がかりとして. 聖隷学園聖泉短期大学人文・社会科学論集, 2, 135-148.
- 田村毅 (1984). 日本人家族の適応力と凝集性に関する予備研究：FACESⅢと FACESKGⅡの信頼性と妥当性の検討. 東京学芸大学紀要第 6 部門, 45, 135-145.
- 築地典絵 (1999). Family System Test を用いた児童の家族関係研究. カウンセリング研究, 32, 264-273.
- 築地典絵 (2001). Family System Test の基礎的研究 I－FACESⅢおよび疎外感尺度との比較を通して－. カウンセリング研究, 34(2), 136-144.
- 築地典絵 (2005). 家族関係構造の査定法に関する検討. 人間環境学研究, 3(1), 19-25.
- 築地典絵 (2007). シンボル配置技法による家族関係認知の研究－Doll Location Test と Family System Test－. 風間書房.
- 築地典絵 (2015). Family System Test における階層性の検討. 京都女子大学発達教育学部紀要, 11, 55-62.
- 貞木隆志・樫野潤・岡田弘司 (1992). 家族機能と精神的健康－Olson の FACESⅢを用いての実証的検討－. 心理臨床学研究, 10(2), 74-79.